

## 文化継承の担い手

京都市立西京高等学校二年（京都府）

## 定池 絢音

「文化祭のお茶会は、今年も中止になりました」。

部長からそう告げられたとき、私は茫然とした。緊急事態宣言が京都にも発令されて三日後の出来事だった。お茶会は中止になるかもしれない、と薄々感じていたものの、現実になるとそのショックは何倍も大きかった。

高校生になって、念願だった茶道部に入学した。中学生の頃から始めたバドミントン部と兼部している。茶道に興味を持ったきっかけは、私の母が以前習っていて、茶道で学んだ経験話してくれていたことだ。話を聞いていくうちに、私も是非美しいお点前と所作を身に付けたいと思った。

そして入学して一年が経った夏休み。文化祭で実施するお茶会に向けて、毎日お稽古に励んでいた。私はバドミントン部の練習の合間をぬって参加していた。けれども参加できる回数が限られていたのもあり、なかなかお点前を覚

えることはできず、同い年のみんなよりも後れを取っていた。「見て学ぶ。身体で覚える」といわれるが私にはそれが難しかった。何とか覚えるために色々な工夫をした。その一つが、人のお点前を見て同じ動きを真似ることだ。お点前は型が決まっっていて、皆同じ所作をしているのに、一つとして同じお点前はない。キレがあり力強いお点前、ゆったりとして優美なお点前。一人一人が自分の茶道を持っている。その中でも、私の憧れる「美しいお点前」をする人には共通点があった。それは「丁寧」なことだ。帛紗をさばいたり、お茶碗を持ったりする小さな動きでも心が込められていて丁寧さが伝わってくる。母は日常生活でよく「いつも丁寧に」

と言う。これが茶道で学んだことだったとは私も茶道を始めてから気がついた。丁寧な所作や振る舞いは茶道に限らず、生活でも取り入れていってほしい。そんな思いが母にはあったので私によく言い聞かせていたのだろう。おかげで丁寧なお点前を心がけるようになり、お点前がきれいだと褒められるようになった。

丁寧なお点前を心がける上で意識していることがある。

「恥をすて人にも問い習うべしこれぞ上手の基なりける」千利休の利休居士道歌で、上達するには恥を捨てて知らないことを聞いて学ぶことが大切だということだ。私は習い始めの頃は教えてもらったことをもう一度聞くのは恥ずか

しくて聞けなかったが、今はすぐに質問するようにしている。分からないでいることよりも、分からないまま放っておくことのほうが恥ずかしいのだと千利休は教えてくれたのだ。

室町時代から続く茶道は、どんな時代でも絶えることなく現代まで受け継がれてきている。戦乱の世も、天災に見舞われた時も継承されてきた。今は新型コロナウイルスによってお茶会もほとんど中止されている。実際に私もお茶会に参加したことはなく、この秋に文化祭で開くお茶会は初めてで楽しみにしていた。けれども、またもやの中止。これまでの茶道のお稽古の成果を披露する機会を失い、やるせない気持ちでいっぱいになった。けれども、ここで立ち止まっただけはいけない。私は茶道を習う茶道文化を継承する一人の担い手なのだ。今後のお茶会に向けて、茶道のお稽古に励んでいく。茶道文化を継承していくという意識をもって。